

ともに消えてしまうので毎日新しい願いを一つかなえてもらうが、どれも子どもたちを窮地に陥れることになる。サミアドの変わり者ふりと、子どもたちの危機脱出の努力が楽しい。

【参考文献】吉田新一『イギリス児童文学論』（一九七八 中教出版）（酒井邦秀）

根本 進 ねもとすすむ 一九一六（大5） 漫画家。

東京都に生まれる。小学生時代、北沢楽天の時事漫画に影響されて「時事新報」に投稿を続け、慶応大学法科中退後、一九三二年時事新報社に入社。戦後、写真新聞「サンニユース」に、岡部冬彦とともにサイレント漫画を発表し、続いて風刺雑誌「VAN」や「新青年」などにもつばらサイレント漫画を発表。五一年二月朝日新聞夕刊に連載開始の「クリちゃん」により漫画家としての地位を確立し、六五年三月三一日連載終了。以後も「クリちゃん」を描き続けている。

（川勝泰介）

根本正義 ねもとよしまさよし 一九四二（昭17） 児童文学研究者。東京生まれ。立正大学国文学科卒。同修士課程終了。高校教師を経て一九八〇年より東京学芸大学助教授。はじめ鈴木三重吉「赤い鳥」を研究対象とし、昭和期ことに大衆児童文学に関心を移す。学風は手堅く、伝統評価、ナシヨナリズムの視座を重視する。

主著に『幼児教育のための児童文学』（一九七四）、『鈴

木三重吉の研究』（七八）、『昭和児童文学の研究』（八四）、『国語教育の遺産と児童文学』（八四）があり、しいに国語教育研究に傾く。（宮崎芳彦）

ノヴァーリス *Novalis* 一七七一—一八〇一 ドイツロマン派の代表的詩人、小説家。本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク。オーバーバーギーターシュテット生まれ。すべて詩的なるものは童話的でなくてはならぬ」と唱え、ティークらとロマン主義運動に貢献した。早逝した少女ゾフィーとの恋愛体験から生まれた『青い花』（一八〇二）は、未完ながらロマン派の名作である。『ザイスの学徒』（〇二）中の童話『ヒヤシンスとバラ』、長詩『夜の讃歌』も有名。（川西英沙）

野上 彰 ののがみあきら 一九〇九（明42）—昭42 詩人、劇作家。本名藤本登。徳島に生まれ、東京大学文学部を経て京都大学法学部中退。川端康成に師事。戯曲『夢を食う女』（起稿一九四〇、初演四八）を出発点に詩、戯

曲、小説、翻訳、放送台本などあらゆる分野で執筆活動を展開、かたわら「火の会」(四六)の企画創設など、芸術家、文化人の交流に力を注いだ。詩集は『前奏曲』(五六)、『幼き歌』(六八)の二冊にとどまるが、むしろ『こうもり』ほか多数のオペラ、オペレッタ訳詩が、音楽を通しての美しい日本語の普及に果たした功績は大きい。すなわち彰がこの仕事を最も愛した証跡であり、同じことは児童文学の領域にもいえる。翻訳では『ラング童話集』(五五)、創作では『シル・マーチンものがたり』(六〇)、児童劇では学校劇集『愛の手』(四九)が代表作である。とくに後者はスケール雄大な長編童話で、主人公の狐シル・マーチンの横顔は、愛に満ちた理想の父親像を思わせて楽しい。(中山知子)

野上弥生子 やのがみ 一八八五—一九八五(明18)昭和60)小説家。本名ヤエ。大分県北海郡臼杵町出身。一五歳で上京し明治女学校普通科に入学。二一歳で高等科卒業。同年、東京大学英文科在学中の野上豊一郎と結婚。漱石山房に出入りする夫の感化を受けて習作『明暗』を書く。翌一九〇七年夏目漱石の紹介で処女作『緑』を『ホトトギス』の巻頭に発表。以後順調に文学活動に励み『海神丸』(一九二二)など種々の中短編を書き進む一方、代表作『真知子』(三二)、『迷路』(四八—五六)、『秀吉と利休』(六四)、『森』(八五)などの長編大作を刊行した。その独特なりアリズムは漱石から写生文や

文学者の生き方を学び、夫の影響による英文学の教養と翻訳を通じて身につけた知的・合理的・近代的思考に基づくものといわれる。ほかに翻訳、戯曲、随筆、評論、童話、紀行文など作品の幅も広く、自伝的長編小説『森』(未定)は一〇〇歳を目前にして死去するまで書き継がれた稀有の労作である。児童文学としては『少女の友』増刊号掲載『桃咲く郷』(二一)の少女小説で出版したと思われ、『赤い鳥』、『ゴドモアサヒ』、『婦人公論』などに掲載の童話は翻訳、翻案を含め多量である。『愛子叢書』第五編『人形の望』(二四)は英知を根本理念とし、翻訳にブルフィンチ『伝説の時代—神々と英雄の物語』(二三)、シュペーリ『ハイヂ』(二〇)、論文『童話文学』(三三)などがある。三児の母としての教育信条に根ざした作品が多く、童話執筆は大正から昭和戦前に集中している。(深谷禮子)

野口雨情 のぐち 一八八二—一九四五(明15)昭和20)

民謡、童謡詩人。本名英吉。茨城県磯原(現北茨城市)の素封家の長男として生まれる。父野口量平、母てる。

恵まれた家庭環境で幼少年期を送り、磯原尋常小学校、高等小学校を経て、当時衆議院議員であった伯父野口勝一を頼って上京、順天中学に学んだ。中学時代から俳句や詩を創作していたという。一九〇二年、東京専門学校(現早稲田大学)高等予科に入学、小川未明、鈴木善太郎らと面識を得たが、翌年中退、詩作活動に没頭

した。○五年、創作民謡集『枯草』を高木新知堂より自費出版。○七年には童謡『七つの子』の原型といわれる『山がらす』を含む月刊民謡集『朝花夜花』（二月・三月）を刊行した。同年三月、人見東明、三木露風、相馬御風、加藤介春らと早稲田詩社を結成。五月、北海道に渡り、北鳴新聞社、小樽日報社、北海道タイムス社などを転々とし、その間に石川啄木や西川光二郎と交わり、社会主義思想に触れた。○九年、北海道を去り、一時上京して有楽社に入社し「グラヒック」の編集に従事した。一一年九月、母でる死亡。翌年やむなく帰郷し、広大な山林の管理、植林事業に専念、漁業組合長などの公職にもついた。一五年五月、妻と離婚。文学への情熱断ち難く、悶々とした生活を送る。一八年一月、水戸好文亭で開かれた木星記念会に出席し、横瀬夜雨、山村暮鳥、大関五郎らと会う。この年水戸の中里つると結婚した。一九年、『茨城少年』の編集に従事し、童謡欄の選者となる。六月『都会と田園』を刊行。一月から「金の船」に童謡を発表しはじめ。『船頭小唄』はこのころの作である。二〇年六月、上京、西条八十の紹介で「金の船」の発行所キンノツノ社編集部勤務するとともに毎月同誌に童謡を発表、『赤い鳥』の北原白秋、西条八十と並んで童謡運動の第一線に立った。二一年二月に民謡集『別後』を、六月には、童謡集『十五夜お月さん』を刊行。童謡運動

の隆盛期にあつて、『十五夜お月さん』『四丁目の犬』などが、白秋の『あわて床屋』、八十の『かなりや』などと前後してレコード化された。このころから全国各地に講演旅行に出かけ民謡、童謡の普及に努めた。二三年には『船頭小唄』が、二八年には『波浮の港』が、翌年には『紅屋の娘』がそれぞれ大好評を博した。その間に『沙上の夢』（一九二三）、『極楽とんぼ』（二四）、『青い眼の人形』（二四）、『雨情民謡百篇』（二四）などを次々と刊行し、民謡、童謡界の第一人者としての地位を確立した。その作風は完全に民衆の側に立ち、いわゆる草土の詩人をもつて任じ、郷土詩を無視して民謡の存在はない」と呼び、土の香り豊かな郷土詩、自然詩で貫かれている。なお、『童謡作法問答』（二二）、『童謡の作りやう』（二二）、『童謡十講』（二三）、『童謡教育論』（二三）、『童謡と児童教育』（二三）などの理論書がある。四五年一月二七日、疎開先の宇都宮で生涯を閉じた。

『十五夜お月さん』おつきさん 童謡集。一九二一年尚文堂刊。『蜀黍畑』を巻頭に『十五夜お月さん』『七つの子』など七一編を収録。郷土の人と土とに親しみある方言、独特のオノマトペ、田園自然に題材を求め、悲しみと深い愛情を内包する独自の傑作を網羅した第一童謡集。本居長世作曲の『十五夜お月さん』、『豊作唄』、『帰る雁』の曲譜を付す。

【参考文献】『みんなで書いた野口雨情伝』(一九七三 金の星社)

(和田義昭)

野尻抱影

ほしり
ほらえい

一八八五—一九七七(明18—昭52)

天文学者、ノンフィクション作家、翻訳家。本名正英。横浜市出身。早稲田大学英文科卒業後、出版社勤務をしつつ、ロマンティズムあふれる星座とその美しさに関する文章をつづる独自の境地を開拓することとなる。代表的著述に『星の神話伝説集成』(一九五四)、『日本の星』(五七)などがあり、それらを児童対象のものとして平易に物語風に記述した著作も多い。大仏次郎は弟。

(岡田純也)

ノーツフ ニコライ・H

Николай Николаевич Нозов

一九〇八—七六 ソビエトの児童文学作家。ウクラ

イナ共和国の首都キエフ生まれ。モスクワの映画大学を卒業後、約二〇年間教育映画、動画の監督を務めた。

一九二八年、幼年向け雑誌「ムルジルカ」に短編『*Самейники* ひょうきん者たち』を発表して作家活動に入る。その後、初の短編集『キャンプ場の怪談』(一九

四五)、続いて『*Туленьки* 階段』(四六)、『*Веселые рассказы* 楽しいお話集』(四七)の出版で、ユーモアを

得意とする作家として一躍人気を得た(日本では『ピストル』ほかの友だちミーシカなどで短編が紹介されている)。

その後中編童話に取り組み、『楽しい家族』(四九)、『*Дневник Кели Синичина* コーリヤの日記』(五〇)

を書き、『*Уйірча*と学校友だち』(五一)では国家賞を受賞。日常生活の中で子どもの心理を捉え、さりげない教訓性とユーモラスな筆致が特徴。『ネズナイカのぼうけん』(五四)などのファンタジーの長編三部作もあり、六九年に国家賞を受賞。

(松谷さやか)

ノートン メアリー Mary Norton

一九〇三—イ

ギリスの児童文学作家。女子修道院経営の学校で教育を受け、一九二〇年代には女優、四〇年代からは子ども向けの著作もはじめた。二七年に結婚、四人の子どもがいる。現在エセックス在住。処女作はアメリカ滞在中に書かれた『魔法のベッド南の島へ』(一九四三)で、これは続編『魔法のベッド過去の国へ』(四七)と合わせてウォルト・ディズニー・プロダクションにより映画化されている。カーネギー賞、アメリカ図書館協会賞などを受賞した『床下の小人たち』(五二)は、戦後イギリス児童文学の代表作の一つとされる。その後『小人たちの新しい家』(八二)まで全五部作となったこのシリーズは、イギリスの家庭の床下に住みついた小人一家のさまざまな試練の物語であるが、小人たちは昔話の小人と違って、一切の魔法をもっていない。また小人たちの住む床下の縮尺の正確さはスウィフトの『ガリヴァー旅行記』を思わせるほどリアルである。日本ではネズビットにはじまるエヴリデイ・マジックの伝統を継ぐ作家とされ、現代における魔法の衰退を

描いたファンタジーと評される。ノートン自身、『床下の小人たち』について、「身の回りの世界という微小宇宙とそれを支配するあらゆる権力という全人類のジレンマ」を表現したと語っている。

〔参考文献〕安藤美紀夫『世界児童文学ノートⅡ』（一九七六、偕成社）
（酒井邦秀）

野長瀬天夫

のながせ

一九〇六（八四）（明39）（昭59） 詩

人。奈良県吉野郡十津川村の生まれ。私立十津川中学校文武館卒業後六年間、郷里で小学校教師を務め、一九二九年上京、詩作とともに編集の仕事に入る。中学生のころから島崎藤村、土井晩翠、伊良子清白などの詩に親しみ、郷土の先輩玉置淳三の影響で詩をつくりはじめた。野口雨情、土岐哀果（善麿）、石川啄木なども愛読した。上京後は生田春月の「詩と人生」に伊藤整らと投稿し、百田宗治の「椎の木」や、アナーキズム系の詩誌「弾道」などで活躍した。詩集としては『故園の詩』（一九四二）、『大和吉野』（四三）、『熊野演歌』（四四）、『日本叙情』（六七）、『晩年叙情』（七二）などがある。日本児童文芸家協会理事として少年少女小説の作品も多く、『山のよび声』（五八）、『朝子の坂道』（六〇）などが知られているが、少年少女詩集『あの日の空は青かった』（七〇）は、サンケイ児童出版文化賞を受け、『小さなほくの家』（七六）は野間児童文芸賞や赤い鳥文学賞を受賞した。そのほか『少年は川をわたった』

（七七）などもある。社会性をもった詩に出発したが、だいに郷里十津川への郷愁に根ざした、生活リアリズムの少年詩に独特の味わいを生み、その朴訥な人柄とともに、地味だが確実な歩みを続けてきた。『小さなほくの家』は、どこにでもいる、しかし作者の理想とする少年とその家庭を描いた作品として高い評価を受けた。
（尾上尚子）

野辺地天馬

てんま

一八八五（一九六五）（明18）（昭40）

児童文学作家。本名三右衛門。岩手県二戸市に生まれる。一九〇三年中田重治設立の東京聖書学院に入学、彼の影響を強く受ける。〇五年東洋宣教会に入り上沢支部の主任となる。児童伝道を終生の使命とし、一四年日本基督教団富士見町教会に所属して、日曜学校協会の雑誌の編集や夏期学校の指導に当たる。個人誌『小光子』を発行する。また、この教会牧師植村正久の『福音新報』や羽仁もと子の『婦人之友』の編集を助け、『子供之友』の編集主任として児童宣教と教育に専心する。全国各地の小・中学校に招かれて子どもための口演をして歩く。『近世偉人物語』（一九一八）はその口演に使われたものをまとめたもの。主な作品には『ハナビラ』（二四）、『ふしぎな王子』（五五）、『野の花と空の鳥』（六五）、『旧約物語』（四六）、『新約物語』（二八〇）などがあり、日本のキリスト教児童文学の発展に貢献した。
（大久保みどり）

野間清治（せいじ） 一八七六一一九三八（明9）昭13)

我が国の代表的な出版人。群馬県桐生町生まれ。一〇四年、東京帝国大学臨時中等教育養成所卒。沖繩県立中学教師、県視学、東京帝国大学法科首席書記。〇九年大日本雄弁会を発足。翌年二月に雑誌「雄弁」を創刊、続いて講談社を設立するに至った。「講談倶楽部」「キング」など雑誌九誌を発行し出版王国を築きあげた。「少年倶楽部」「少女倶楽部」「幼年倶楽部」の発行によって大衆児童文学の発展に寄与した。自伝に『私の半生』（一九三六）がある。（金平聖之助）

ノーマン リリス Lillith Norman 一九二七—

オーストラリアの児童文学作家。児童文学の図書館員を務めたのをきっかけに作家を志し、『まぼろしの丘』（一九七二）、ファンタジーの『The Flame Takers 光彩を奪い去る者』（七三）などを発表する。彼女の書く作品の一つ一つからは全く異なる作風がうかがえるが、状況に応じて移りゆく少女少女たちの性格の変化を一貫したテーマとして扱っている。現在は雑誌「スクー—ル・マガジン」の編集長。（越智道雄）

野村愛正（あいせい） 一八九一—一九七四（明24）昭49)

小説家。鳥取県生まれ。鳥取中学卒。「鳥取新報」記者を経て、一九一四年上京。一七年一月、「大阪朝日新聞」の懸賞小説に『明ゆく路』が一等当選、翌一八年一月一日から同紙に連載された。同年「新潮」「中央公

論」などの一流雑誌に作品発表の機会に恵まれ、以後作家生活に入る。昭和に入って児童文学も書きはじめ、『虹の冠』（一九二七）、『ヒマラヤの牙』（二八）などの著書のほか、伝記に『太田恭三郎』（四二）などがある。（五十嵐康夫）

野村吉哉（きちや） 一九〇一—四〇（明34）昭15)

詩人、童話作家。悪太と命名される。京都市生まれ。二歳で養子に出され叔父夫婦と満州へ。一九一四年、吉哉と改名。小学校卒業後、生家に帰されるが、翌年家出。各種の店屋を転々とし、二二年ごろから、詩、童話を書きはじめる。その後昭和にかけて「少女物語」「少年少女」など、数種の雑誌に童話を寄稿。同時に「新興文学」「ダムダム」などに、詩、評論、小説を発表。唯一の翻訳書であるアンデルセン『月の物語』（一九二五『絵のない絵本』独語からの訳）を出版。詩集に『星の音楽』（二四）、『三角形の太陽』（二六）がある。三三年九月雑誌「童話時代」創刊。吉哉、吉司の筆名で自らも執筆。貧困、病苦と闘いながら続刊に精力を注ぐ。四〇年八月二九日、肺結核のため、三八歳で死亡。死後、童話集『柿の木のある家』（四一）、評論集『童話文学の問題』（四二）が出版される。（岩崎真理子）

野村胡堂（こどう） 一八八二—一九六三（明15）昭38)

小説家。本名長一。岩手県紫波郡に生まれ、東京帝国大学法科を中退。報知新聞社で長く記者生活を送り、『銭

形平次捕物控(一九三三—三三三)、三万両五十三次(三三三)などを著す。かたわら「少年倶楽部」「少女倶楽部」「少年世界」などに少女向けの時代小説、冒険小説を多数執筆。代表作に『地底の都』(三三三)、『六一八の秘密』(三五五)など。あらえびすの名で音楽評論家としても知られる。(上田信道)

野村政夫まさおのむら 一九〇九—四六(昭21) 児童劇作家、小説家。別号正雄。東京に生まれ、早稲田大学文学部中退。坪内逍遙の児童劇運動の影響を受け、自宅に子ども演劇、音楽、舞踊などを主とする私設学園を開設し、『子供のドラマ』(三一)、『舌切雀後日譚』、『くろんぼ巡礼』など一五編)などの児童劇脚本のシリーズを数多く刊行。その数は、おびただしい数にのぼる。『児童劇の作り方と指導法』(三三)、『学校劇研究』(三九)などの指導書や、女学生のための脚本集から、朗読法の指導書、大衆小説などまで多様な執筆活動を行ったが、その後の学校劇や児童劇への影響は、あまり認められない。戦後一九四六年五月、劇団童話座を結成して『小公子』を東京千代田区の飛行館で公演したがまもなく急逝している。(富田博之)

ノンフィクション 文学・児童文学用語。小説・童話のようなフィクションではなく、事実に基づいた記録性の強い文学をいう。伝記・生物記・ルポルタージュ・随想・歴史・科学ものなどを含む。単に個々の

事実の忠実な記録ではなく、多くの事実を素材として扱い、最小限の虚構によってまとめた有機的統合体である。したがって、フィクションと正面から対立するものではなく、現実性・科学性・法則性を踏まえて、事実を最優先させ、それを生かすようにのみ虚構が用いられる。「事実は小説より奇なり」といわれるような迫真性がその基本である。とくに児童向けノンフィクションは、読者の好奇心・探究心・知識欲を刺激すると同時にヒューマニズムに立脚すべきである。ゴースキーは『テーマについて』(一九三三)で、これらの図書は「人間の思考と経験の最終結果を提供するだけであってはならない。それは読者をして研究活動の過程そのもののなかへひき入れ、諸困難を克服しながら、正しい方法を探求していった過程を順序を追って示さねばならない」として、イライーンの著作をあげている。シートン『動物記』やファーブル『昆虫記』は国家的に評価が高い。我が国では、この分野の図書は多いがほとんど単なる「知識の本」でしかない。戦前で注目されるのは吉野源三郎『君たちはどう生きるか』を含む新潮社『日本少国民文庫』であり、戦後はたかしよいち、井尻正二、石川光男、神戸淳吉、遠藤公男などが作品を残している。(勝尾金彦)